

## 砂漠に雨が降る時 序章

### ●ACT.1-START UP

乾燥した空気。鋭い熱気。刺し通す太陽光線。地面は、真赤に焼けた砂が、延々と続いていった。

砂漠。名も無い砂漠。人が踏み入る事の無い砂漠。豊かな土の死骸だと、人は言う。この地上は、年負えば、いつかは砂漠になる、と。

未開な星。辺疆な星。野蛮な星。言い方はいくらでもある。とにかく、人の住んでいる惑星に変わりはない。彼らは、「宇宙の中の一つの星に住んでいる」事さえも認識せずに、日々を送っている。

その惑星に、赤道下を伸びる、巨大な砂漠があった。

静かに時の流れに沿って、その姿を変えていく砂漠には、名は無かった。

ザザ……ザザザザ……。

風が吹く度に、砂が運ばれ、姿を変えていく砂漠。昨日あった、大きな山は、次の日には、大きな谷へと変化する。

その砂漠の中を歩く女が一人、分厚いローブをはおり、ゆっくりと歩いている。

もう既に、出発した街は視界から消え、砂と空の二分された空間が広がっているだけだった。

この砂漠を歩いている女は、この過酷な環境をモノともせず、歩いてきた。一歩一歩、歩く度に、ローブがゆきゆきと揺れた。肌を焼き付くしてしまいそうな熱風が吹き付けても、女は足を止める事無く、歩き続けていた。

\* \* \*

夜になった。太陽は砂の果てに沈み、今まで沈黙していた星々が、ワツと声をあげた。空気の澄んだこの砂漠では、星と星とがひしめき合っているのを見る事が出来た。

女は、歩き続けていた。未だ一度も止まった事がないようだ。ドザア……。

どれくらい歩いただろうか。女はついに、砂の上へ腰を下ろした。わずかではあるが、荒い息遣いが洩れている。

女はそのままゴロンと体を倒した。砂はまだ温かい。しかし、夜の砂漠は、氷点下になるのだった。

女は大きく息を吐くと、空を眺めた。空一面に広がる星の海は、疲れた精神と肉体を休ませるには充分だった。心が自然と安らかになる。女は、いつの間にか、静かな寝息をたてていた。それから女は、水の音で目を覚ました。そして、体が非常に冷えている事に気が付いた。

女は上半身を起こして、周りの異常に気付いた。

「雨だ。」

女は、短く声を発したあと、立ち上がった。

ブルル!

女は、寒さに震えた。体がびしょ濡れだった。体を縮めて、両手で自分の肩を抱く。そして空を見上げた。今まで睨んでいた筈の星空は消え、暗闇に包まれていた。

不意に、ボウツと砂漠が光った。女は、一瞬、目を疑った。しかし、再び、砂漠が光る。それも、至る所で。

女の足元は、水が流れ、砂を流していた。強く冷たい風も吹き付ける。しかし、女はそんな事には全く気に止めず、あちらこちらで光る砂をじっと見つめていた。

「本当だったのか……。」

女は、小さく呟くと、ゆっくりと歩きだした。

数十歩ほど歩いた時、女は、しっかりとした地面に立っていた。砂漠独特の、めり込むような、フワフワしたような足ざわりではなく、固い地面の上に立っていたのだ。彼女の下には、固い地面が存在しているのだ。

その地面の上にある砂を、水が洗い流す。いつの間にか前方には大きな山が出来ていた。

女は、ブーツとして、事の成り行きを見ていた。見ているしかなかった。砂の下から見えていた光は、しだいにハッキリとし、砂の下から踊り出た。そして、パアッと一直線に空へ向かって伸びて行く。

土竜の炎。

この地方に伝わる、砂漠から天に向かって伸びる数本の光である。

雨がいつの間にか止んでいた。全てが終わったかの様に。

女は、呆然として立ち尽くしていた。

彼女の足許には、金属質な地面が、砂から盛り上がり、前に向かって真っ直ぐ伸びていた。所々から、強い光が天に向かって発せられていた。

\* \* \*

朝。朝が来た。

また、この砂漠を地獄に変える太陽が、上る。

女は、立ち上がった。

女の前には、延々と続く、金属質の道が出来ていた。まるで、女を導くように。

半分、その地獄の姿を現した太陽が、女の体を一直線に照らした。

パツと風が起る。

女がかぶっていた、深いフードは、脱げ、長い髪の毛が、舞った。

女は、歩き出す。

どこへ続くかわからない、この『道』を。

## ● ACT 2 - STAND-BY

■ 惑星 Gum Friya —— エル

アブデインの街の酒場

名もない砂漠の北に位置する、アブデイン (Abdin)。砂漠の出

入口である。

惑星グムフリヤは、とある太陽系の四番惑星である。何故、この太陽星系に名前がないかと言うと、それは、地元グムフリヤ(Gumhurya)の人間が、ソーラーシステムの中に生活している事を認識しておらず、またこの星系に名を付けるような者も、宇宙にいないためである。

グムフリヤは、大きく、三つの大陸に別れ、それぞれ、エル

El ShaRiya

El Ezebiya

El Khaly

El

我々の言葉では、テラ(Terra)に相当する。

大陸と大陸との間は、青い海で埋められており、宇宙からみると、グムフリヤは青く見える。そう、青い星である。地球のように。

ここに住む人間達は、適当に集まり、適当に暮らしている。

国というモノがなく、お互いに協力しあえる者同士が、お互いに集まり、一つの街や村、自治区を作っている。

夕方のアブディンの酒場は、いつにも増してにぎわっていた。そういうえば、明日は、休日だった。街の人々が皆、安息する日である。

然程広くない酒場は、人でごったえがえている。カードや賭事などのゲームに熱中する者。独り、カウンターに座って酒をすすめる者。バック

に、幸せな一時を過ごす者。甘いBGMにつられて、ロブげをかわす二人。

この地方の、蒸留酒の一つ。

外が、暗くなる中、砂が吹き荒れていく事も、彼らには関係の無い事だった。

明るい話し声、幸せそうな声、それらが、星々がちらほらと見え出す薄暗い空間の中へ響いていく。  
キィ……………

酒場の木製の扉を押す者があった。

一人のローヴをおった者が、この酒場に入ってくる。

たまたま開いていた、一番奥のカウンターに、ついた。そして、マスターを呼ぶ。

背の高い、ガツシリとした男が、サッとやって来る。

「ブラックを。」

ローヴをおった者は、そう言うと、深く被っていたフードを、取り払った。その深いフードの中からは、顔立ちの整った、綺麗な顔が露呈された。女だ。真っ赤な、鮮血のような、髪が、印象的だ。その赤の中に交ざる、筋のような紫の調和が、絶妙だった。顔は、少し縦長気味で、肌の色は、白とも、黄色とも断言できない、半白人、半黄色人と言った感じだ。そして、目は、黒だった。見つめているモノさえ、映さない、全ての光を吸い込んでしまうような……そう、まるで、ブラックホールのような、暗黒の瞳。

彼女は、店の主人の顔を見上げると、嫌みの感じられない薄笑みを、こぼした。

「お客さん、見かけない顔だね。どこから来たんだい？」  
男は女に背を向け、棚から酒瓶を取り出しながらそう言った。

男は、肩幅が広く、腕も太かった。はちきれんばかりの筋肉を、白いシャツがなぞっていた。

「カイロから……。」

女は、自分に背を向けて作業をしている男の背中を見ながら、ボソッとそう答えた。

「カイロ？ あんな所から来たのかい？ 東も東、はるか彼方じゃあないすか。」

男は、グラスを女の前に差し出すとそう言った。

「ああ。こっちと向こうじゃ、全然雰囲気が違うな。」

女は、一礼してグラスを受け取った。男が、そのグラスに酒を注ぐ。

「そりゃあ、そうですよ。なんたって、向こうはかなり文明が進んでるって話じゃありませんか。」

男は、持っていた酒瓶を女の前におくと、苦笑しながら言った。

「ああ。建物一つとっても、違うな。」

女は別に、文明の差など気にしない様子で、サラッとそう答えた。そして、グラスの縁を、自分の口元へ近づける。

「お客さん、名前は？」

不意に、男が、女の顔をのぞき込んだ。

「あ？」

女が、呆気に取られて、男の顔を見上げる。

「俺はこの酒場のマスターだ。名前は、ブラク||レイス。酒と同じ名前なんで、ブラクってそのまま言われてるんだ。オメーさんは？」

笑いながら、男は名乗りをあげた。

「ラハブだ。姓はない。ま、短い間だが、よろしくな。」

女は、素っ気なくそう言うと、口元まで持ってきていたグラスを傾け、酒を自分の口の中へ、流し込んだ。

男は、ふーんとうなずくと、女の前から姿を消した。と言うよりは、女の前を離れた。そして、自分の仕事を再開する。

女は、自分の背でなる、バックがら、酒を楽しんだ。

\* \* \*

ドン！

三〇分ぐらいしてからだろうか。不意に、女の背中を叩く者があった。

「よう！ オメーさん、余所モンだろ？ ちょっと酒につき合えよ。」

数人の男が、女を扇状に囲んだ。女は、回転椅子を利用して、身体を一八〇度回転させ、自分の背中を叩いた男と向き合った。女の視界の中に入ってきた男は、ニッコリ笑ってみせた。ちよっと気障っぽい男だが、あか抜けた健康的な印象を与える、快活な男だった。その周りにいる男どもも、印象は同じ様なモノだ。ただ、自分の左に居るのは、女だった。三人の男と、一人の女だ。おそらく、皆、この男の友人か何かだろう。類は友を呼ぶという諺もある。女は、そう思った。

「向こうに、テーブルが空いたんだ。」

さらに男はそう付け加えた。親指で、空いているテーブルを指さす。

「ああ、いいね。」

女は、薄い笑いを浮かべながら、そう答えた。

「そりゃあ、良かった。ふられたら、どうしようかとおもっちゃまったぜ。」

タハハッと、高く笑って、男は、女を奥のテーブルへと案内した。

アブディンには気さくで、思いやりのある人間が多い。そのせいか、御節介な所があったり、義理堅い所があったり。特に余所者は丁寧に扱ってくれる。

「カイロから来たんだって？ ブラクの奴が客に言い触らしたぜ。」

「まあ、ブラクは、お喋りが仕事みたいなもんだからな。」  
軽く笑いながら、テーブルについた彼らは、話をし出す。

「あ、俺、シナン(Sinan)ってんだ。で、コイツがモランディ(Morandi)で、あっちがカスル(Qasr)、でこれが、メリディア(Meridia)。俺の、恋人。」

最後の言葉は、少し照れ気味、それでいて自慢気に、男、シナンは、自己紹介をした。

「俺達、ボディーガードやってんだ。最近、物騒になってきてな。余所モンがデカイ顔して歩くようになってさ……。窃盗、殺人と、事件が絶えないんだ。俺達は、ボディーガードだけじゃなくて、そう言った問題を解決したりなんかしてんだだけだよ。」

男は、酒場の中を一通り見渡してからそう言った。なるほど、この酒場の中だけでも、流れ者風の輩が、沢山いる。

「俺はラハブ。単なる旅人だ。ここへは、ある噂を聞いてやっ

てきた。あんたら、知らねーか？」

ラハブは、自分の前に座る、四人の人間の顔を、それぞれに目配せしながら、そう言った。

「噂？」

シナンが、身を乗り出す。

「いや、伝説と言った方が、正しいかもしれねーが……。」

ラハブは、先程のセリフを撤回する。

「ひよっとして、土竜の事じゃない？」

メリディアが、シナンの横からそう言った。

「ああ、それだ。それについて、知っている事があれば……。」

俺は、それが何か確かめたくて、こうしてココまで来たんだ。」

ラハブは、今度は、メリディアの方へ顔を向けた。

「さあなあ。このアブディンに古くから伝わる話なら知っているが……。」

一同は、首をかしげた。

「それでもかまわねえから、話してくれねえか？」

ラハブは、持っていたグラスをテーブルの上に置くと、半身乗り出して、四人に訊ねた。

「俺達の間では、土竜は砂漠に雨を呼ぶ竜として伝わってるな。土竜の炎が天まで届いて、雨を呼ぶって言う……。」

シナンは、喋り出した。

「その光は、だいたい二月に一度くらい。だけど、結構不定期だぜ。」

カスルが、続けて言う。

「夜中の一二時頃から朝方の四時にかけて、数本の炎が、天に

上る。その炎は、このアブデインからでも見えるんだ。」

モランディがさらに続ける。

「でも、私達アブデインの人間は、土竜を恐れているから、砂漠に足を踏み入れた者はいないわ。実際、あの炎が何なのかも知ってる人なんて、このアブデインにはいないわよ。」

最後に、メリディアがそう言った。ラハブは、うんうんとうなずいている。

「ま、行ってみなけりゃわかんねーって事だな。」

ラハブは腕を組みながら、そう言った。

「俺としては、あまりいい気持ちはしないが、ま、止めはしないさ。行きたければ行けばいい。距離はそうだなあ、どれくらいかなあ。ココからでも炎は見えるんだから、そんなに遠くはないんじゃないか？」

シナンは、腕を組み、斜め上を向いて、考えた。

「二日三日歩けば、つくだろ？」

カスルが、介入する。

「どちらにしろ、時期が悪いよ。ついこの間、炎が上がったばかりだから、あと二カ月くらい待たないとね。」

モランディは、酒を手にしなげら、そう教えてくれた。

「そうだな。どちらにしろ、あと二カ月は待たないとな。」

シナンも、考えるのはやめた。

「そうか……。それじゃあ、しばらくココにいさせてもらおうとするか……。」

ラハブは、音程を低くして、ボソツと言う。

「アブデインを案内してやるぜ？ 明日、どうだ？」

シナンが、テーブルの上に身を乗り出してラハブを見つめた。

「ああ、いいね。よろしく頼む。」

ラハブは、笑って答える。

メリディアが、ちょっと不機嫌そうな表情。

ラハブは、それを読みとると、クスツと笑った。

### ● ACT.3 - PROLOGUE

女は、金属質の『道』を歩いていた。

まさしくこれは、『人工物』だ。彼女はそう確信していた。

真っ直ぐ、自分の前に一直線に伸びるこの『道』の果てには、大きな物体がそびえているのが解る。

女は、一步、一步、確実に『道』を踏みしめ、前進した。

全てを灼き尽くす、直線的な太陽光線が、照りつけ始めた。

熱気を誘い、上昇気流が出来る。

女の長い長い髪の毛が、バツと舞った。

しかし女は、前進をやめない。まるで、太陽を愚弄するかのように、太陽に目もくれず、ひたすら、この『道』を進む。

そして、彼女の前には、果てしない階段がそびえ立った。

どれほど歩いたのか解らないが、この『道』の果てにあった、大きな物体が、今度は彼女の目の前にそびえているのである。

そして、気が遠くなるほどの階段が、上へ上へと伸びている。

そう、古代遺跡のような。

遠くで、山のように見えた物体は、これだったのだ。  
さながら、ピラミッドのごとく。

この階段が、どこまで続くのか、解らない。  
しかし、はじめの一步が大切。

女は、一段一段登り始めた。

階段は、非常に無味乾燥だった。

冷たさを感じる、氷のような金属。青く、太陽光線を反射させる。

\* \* \*

ついに女は、登りきった。

古代遺跡を思わせる、この巨大な建造物の一番上に、女はいた。彼女の後ろには、階段が続いている。途方もないくらいの数の階段が。一步足を踏み外せば、何十メートルも下に落下してしまう。

彼女の前には、神殿がそびえていた。

古ぼけた、ボロボロになった石が、あちらこちらに散乱している。そして、レンガの道。荒廢した、人工建造物。立ち並ぶ、エンタシスの柱。それは、真っ直ぐ、奥の神殿へと続いている。女は、荒い息遣いをしていた。

体力や、身体の丈夫さに自身があっても、休まずにあの階段を登ってきたのは、相当なダメージとなった。肩で息をしている。太陽光線も、強く、女を刺し通していた。

しかし、女は、しばらくすると歩きだした。

ゆっくりと、それでいて確実に、前進する。

両わきにそびえる、エンタシスの柱は、今すぐにも倒れて

もおかしくない状態だった。

ころがり、散乱しまくっている石に、つまずきながらも、女は歩き続けた。

そして、神殿の一番奥につく。

前に立ちはだかる、玉座。

神殿と言うよりは、王の間だ。

玉座には、再び階段を登らねばならない。

高さは、七、八m。

女は、大きな溜息をつきながらも、玉座を登った。

少しずつ、玉座が見えてくる。

一段、一段登るたびに、玉座が、彼女の視界にスクロールアップされる。

玉座と同じ段に、女の両足が乗った。

女は、玉座を眺めた。

石でできた、真っ白な玉座に腰掛ける者は、一体の屍。

太陽にさらされて、風にさらされて、砂にさらされて、玉座よりも真っ白になっている、白骨死体。しかし、その髑髏は、真っ直ぐと前を向き、二つの白い腕は、しっかりと玉座のヒジかけに居座り、二本の長い足は、地面をしっかりと踏んでいた。

女は、その屍に近付いた。

その屍は、見覚えのある服装を身にまとっていた。

頭には、王冠。この王冠にも見覚えがある。

「まさしく、これは……。」

女は、小さくそう呟くと、その王冠に触れようとした。

その時、鋭い閃光が、玉座の上に走り、それは屍と、女を包んだ。

女は、まぶしさのあまり、反射的に、顔を多いかくす。そして、手と手の間から、自分の周りに展開する出来事を、見る。確認する。女は、驚きの声をあげた。

彼女の前にいた白骨死体に、異変が起きたのだ。  
不快音。

そう、硫酸や塩酸などが、人間の肌を溶かすような音。そんな音が、音の耳に入ってきた。  
しかし、現実には、その逆だった。

白骨死体に、筋肉が生まれ、内臓が生まれる。  
まるで、身体が溶けていく様を、逆回して見ているように。体組織が一瞬のうちに形成され、肉付きされ、白骨は、次第に生氣を取り戻す。筋肉が、骨を覆い、その上を皮下脂肪が覆い、さらに皮膚が、身体全体を覆っていく。

ピクッ……。

指が動いた。

心臓の、脈拍の音が聞こえる。

真っ白な閃光の中で、桃色の髪の毛が、逆立つ。

そこのはもはや、白骨死体はなかった。

美しくも、妖しくも、真っ白な肌の女性の姿があった。

彼女は、女の方を見ると、ニッコリと笑った。

顔は、顔は解らない。前髪が、顔の四分の三を覆い隠しているのだ。しかし、女は、この人物に見覚えがあった。そして、女は、この女を捜して、旅をしていたのだ。

啞然とするしかなかった。

しかし、勇気を持って、女は、白骨から女性の姿に変身したこの者に、話しかけようとした。

「ヴァ、ヴァル……ア……。」

最後の言葉が言い出せないうちに、女は、弾き飛ばされた。パンと、今まで二人を包んでいた白い光がはじけ、女だけを外へ放り出してしまったのだ。

その時、女は、気を失った。

あとは、何十mも下へ、落下するだけ。

女は、何の抵抗もできない。全ては、自然の法則にしたがって、落ちて行くだけ……。

\* \* \*

それから、どれくらいの時が経ったのか、解らない。

女は、目を覚ました。

ケガも何もしていない。

ただ、辺りは暗かった。

もう夜になったのだろうか……？

しかし、星も見えない。

ここは、いったい何処なのか……？

女は、さっきまでの出来事を、振り返った。

確かに、ここには、自分が求めていたモノがある。

今までの、長い長い旅に、終止符を打つためのモノがある。

確かにそれを、見つけた。見つけ出した。

だが、再び、どこかへ飛ばされてしまった。

ここは、いったい、何処なのだろうか？

暗闇に包まれた空間で、女はただ、溜息をつくほかなかった。

物語は、今、始まる。